

みる つくる がたる

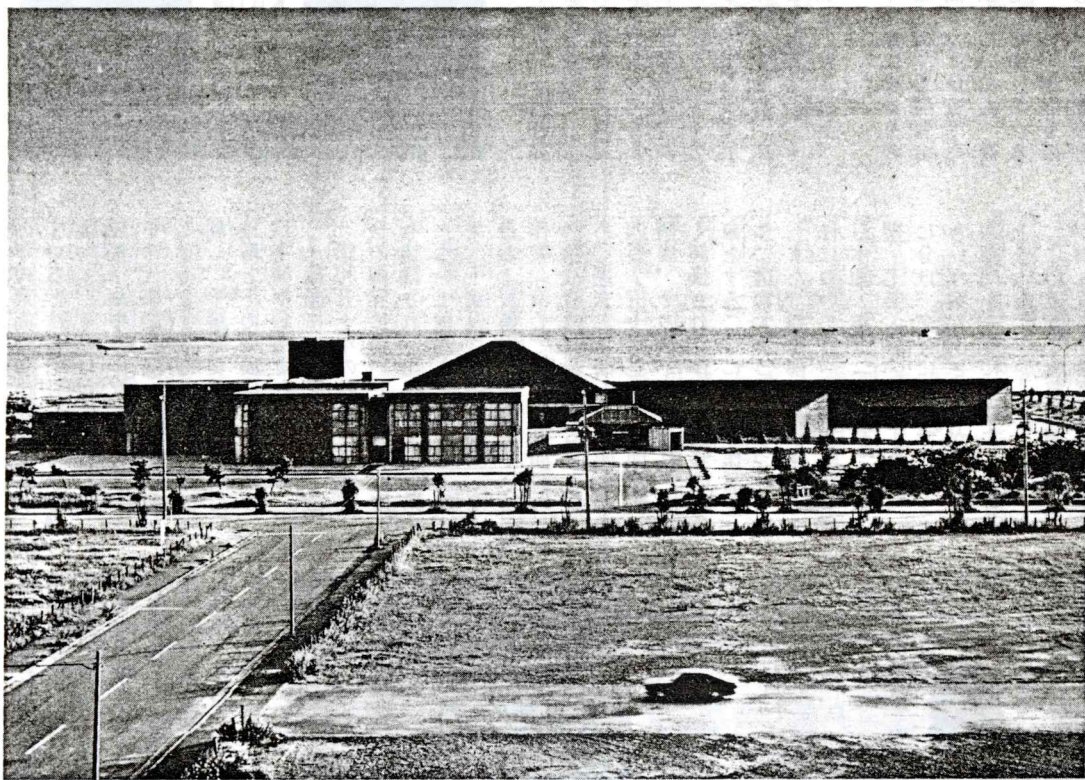
千葉県立美術館報

VOL. 3 NO. 3

昭和52年1月5日発行
編集・発行人 市原 正夫

〒280

千葉市中央港1丁目10番1号
☎0472-42-8311(代表)



千葉県立美術館外観

写真提供＝彰国社(和木通氏撮影)

観潮台

千葉県佐倉藩出身で、日本近代洋画の先駆者浅井忠の資料整備と究明は、本館にとつては基本的な一課題で新年早々に浅井忠特集の、本館研究紀要を編集刊行する。

浅井忠にとどこまで接近できるか館員は年末年始をこのために過したが、私はこの過程で秦恒平さんの「月暗く」(集英社刊)のなかの、正岡子規と浅井忠の交友を描いた「糸瓜と木魚」を再読した。入念な二人の写生の真義に迫ってゆく手法に心打たれたが、とくに、浅井忠の「グレーの洗濯場」など、フランスのグレイ村での名高い連作を「私は浅井忠がそれらの風景画で一等念頭に置いているらしいものを季節との交感だと思つた。露骨に言えば俳句の季節のようなものを画面の空気として表現しようとしている。」と評していた。

浅井が生涯親しんだ俳句文芸を追求している私は、浅井忠論ともいえるこの労作に共鳴し、浅井忠の画業の根幹をしのぶとともに、こうした眼識に対して敬意を表したいと思う。
(高橋在久)

6部門にわたる初の試み

第1回千葉県秀作美術展

昭和52年1月5日(水)～1月23日(日)

開館時間9時～4時30分・月曜日休館

本館は昭和四十九年十月開館以来、物故作家を中心として郷土の先駆的な美術家の再発見とその顕彰を行なってきた。しかし、現在、千葉県には美術の各部門にわたり、多くの作家が活躍し、千葉県美術展覧会(略称県展)を始め、広く県内外の各種展覧会で、その作品を発表し、今日に至っている。

そこで、千葉県にゆかりのある作家を集大成する展覧会を望む声が高まっている。たしかに、県展においても、著名な作家が総て参加しているとは限らず、また、作品そのものにしても、その作家のそ



の年の最高の力作が出品されているとは必ずしもいえない。従って、それに対応すべく、現在活躍中の作家を中心に、その代表的作品を一堂に展覧しようとするもので、広く公開し、千葉県美術界の動向の理解とその発展に資するため本展が企画された。

経過について

昭和五十年の秋頃から展覧会の内容について館内で何度も協議され、出品作家の資格について検討された。その結果、千葉県に在住、勤務、出身および県内で活躍している作家(但し、選考対象期間内の物故者は対象とする)と定め、過去二年間(昭和四十九年四月～五十年三月)の団体展、個展、その他で発表され、高く評価された作品を選考の対象とすることに決め、作品主体に選考することになった。

また、対象部門及び開催方法については、当初六部門(日本画・洋画(含水彩)・彫塑・工芸・書・版画)を二つに分け、交互に隔年で行なうという案も出されたが、結局六部門を一度に展覧することとなった。

このような大筋の開催要項が決まると、早速開館以来行

なってきた調査活動の成果を中心として、当該年度の展覧会目録、図書、雑誌、或は展覧会案内状などのあらゆる資料を活用し、該当作家のリストアップの作業に入った。その結果、千百名近い作家名簿が作成され、更に、これらの

作家の対象期間内における活動状況が調査されるに至った。次に選考委員の人選が行なわれた。選考委員には、あらゆる角度から作品を選考できるということ、千葉という限られた地域であっても、高い水準の展覧会を目的として、



第1回千葉県秀作美術展選考委員会議

美術評論家、ジャーナリストら学識経験者から十名、また地道に制作活動を続ける作家の作品をより多く網羅するために、県美術界の動向に詳しい作家から五名を選び、昭和五一年七月に選考委員を依頼し、快諾を得ることができ、委嘱するにおよんだ。

選考委員は次の各氏である。

- 青木滋芳
- 浅見喜舟
- 植村鷹千代
- 大須賀力
- 加藤貞雄

あけましておめでとうございます。開館三度目の新春を迎え、本年は、関係各位の御協力により、五日より千葉県秀作美術展をもつて幕あけます。

この秀作展は、本館はもちろん、全国的にみても始めての企画かと思われまうので、是非ご高覧賜わりたくお待ち申しあげます。

さて、新春にあたり、次の三点を今年の抱負として、全職員一丸となつて、取組んでいきたいと思ひますので、皆様の一層の御協力と御支援をお願いいたします。

○笹岡了一

○立石春美

○千代倉桜舟

○中村傳三郎

○細野正信

○堀江知彦

○本間正義

○村瀬雅夫

○山谷鉄一

(敬称略・五十音順)

同時に、対象となるべき作家の推薦を、学識経験者代表の委員からは全部門について、作家代表の委員からは部門別推薦とし、委員一人二〇点以

一、企画展等の充実

美術館活動の中で、展覧会事業が中心になることは、いうまでもありませんが、本年度は東山魁夷展をはじめ、本県日本では本館だけの文化庁の

内とし、前記作家名簿を添えて作品の推薦を依頼した。その結果、数十点の重複があり、最終的には一四〇点に上った。

選考委員会について

十月に、選考委員会が本館会議室において開かれた。まず、委員会の運営方針が協議され、展示スペース等を考慮した結果、出品点数を一二〇点以内にすることが確認された。そこで、作品をしぼる作業に入り、二名以上の委員から推薦された作品については

美術館を皆様のより身近なものとしていきたいと思ひます。

二、普及事業の拡充

昨年はつくる活動を具体的に事業化しましたが、本年度は、さらにかたる活動を積極

新春にあたり三つの願い 館長 市原正夫

現代美術選抜展などを取り入れて、より充実したプログラムを組みたいと思ひます。

なお、始めての試みとして、収蔵作品による巡回展(地方展)を県下一会場ほど実施し、

的に展開したいと思ひます。

「美術館談話会」「夏季大学」等の行事のほか、最も生活に密着した日常活動として、美術普及室の仮設置による、美術に関する相談事務から、美

検討の結果、原則的には入選とし、その他の作品については一点一点検討、審議された結果、一二〇点以内に限定することはむずかしく、最終選考点数一二二点ということとで委員会の決定をみた。

部門別内訳は、日本画二二点、洋画三八点、彫塑十九点、書十八点、工芸十七点、版画七点であった。その中から再審議により、さらに日本画一点、版画一点が削られ、結局は予定通りの一二〇点でおちついた。

術図書・雑誌・目録等の自由閲覧による情報提供等を考えています。

三、施設・環境の整備

前記、假美術普及室は、美術普及棟への円滑なる移行を考えてのことで、普及棟の建設と利用のプログラムを、より具体化せねばなりません。さらに、美の殿堂にふさわしい、館内外の美化等につとめます。植栽、屋外展示を始め外構整備を図るほか、館内外に利用者の憩いの場の拡大、それに伴う必要要素への作品の常置展示など考えています。

作家への出品依頼

先の選考委員会での決定をふまえて、翌日から作家への出品依頼が始まった。その結果、日本画の加倉井和夫、関主税、工芸の土肥川泉、書の中台青陵の諸氏からは、もろもろの事情により出品辞退があつたが、その他の作家からは承諾を得ることができた。最終出品点数一六六―日本画二〇点、洋画三八点、彫塑十九点、書十七点、工芸十六点、版画六―と決定をみた。

今回の一六六の作品が発表された個展、団体展は五〇展覧会五九会場となり、そのほとんどは都内を会場とするものである。

おわりに

本展は、過去二年間という時間的な流れと、県内外という空間的な広がりの中から作品を選び、一堂に展観するものである。この六部門にわたる秀作展は、全国的にみても初めてと思われる画期的なもので、県展とはその趣旨、内容等が異なる企画展として、公立美術館の使命・役割から、本格的に取組むべき事業と考え、今後隔年ごとに開催していきたい。



これは、昨年7月1日～11月14日の間に来館された方々のアンケートをまとめたものである。

開館日数 一一二日
回収枚数 一、五四三枚
男 九一三枚
女 六三〇枚

入館者全般からみると、美術館の立地条件もあり、他の

《美の根》

私のへら

大須賀 力
(彫刻家)

彫刻は使用する素材により石彫木彫或は塑造等に大別される。素材から作者のイメージにより外から内へと彫る石彫木彫、粘土を積み重ねて内から外へ構築してゆく塑像と製作の手法上の差異はある。

塑像についていえば制作

用務のついでにという付随的なものより、まず「展覧会を見るため」に来館した人がほとんどである。

入館者状況

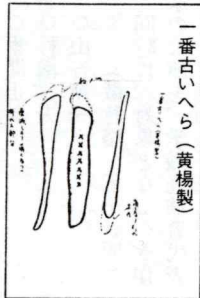
1 男女・年令別

展覧会の内容によって若干の相違はあるが、若い層の来館者には、夫婦或いは家族連れで訪れる傾向が目立っている。

これは、美術が特定の限られた人たちのものではなく、家族などで気軽に楽しむものとなってきた一般的風潮を反映したものともみることができよう。

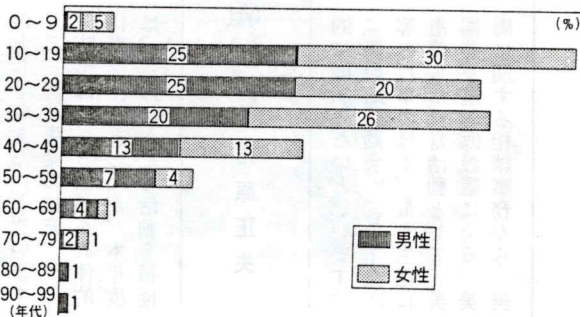
する時、手の補助としての木のへら、鉄べらなどがある。しかし粘土を握った時の感触、

一番古いへら (黄楊製)



掌や指で粘土をつける時の感じこそ、塑像を作る喜びである。

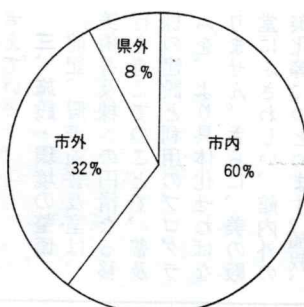
自分は出来るだけへらを使



はない、指の届かない所に手の代りをするのがへらで粘土の時は木のへらを、石膏にしてから削ったりする時は金べらを使う。結局手の代りをするので使い易い様に黄楊の木を削り金べらは鍛冶屋に作らせる。今使ってる木のへらの中には四十年近くたつてもものもある。作った時から見れば甚く磨減してるが愛着や思い出があり捨てられず未だに使う。

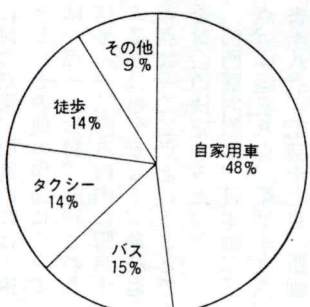
2 居住別

男女とも、市内居住の人が圧倒的であるが、県展期間中は、やはり全県にわたっている。また、県外者は、夏休み期間中に多くみられる。

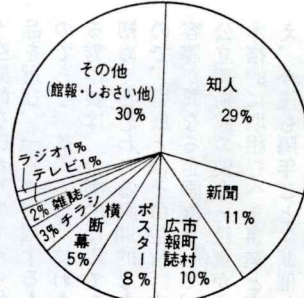


3 利用乗物

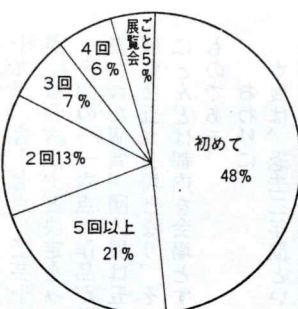
美術館行きのバスが、昨年九月より運行されているが、日曜、祝日に限るためと、本調査が七・八月を含んでいるためか、タクシー、徒歩利用者が見られる。



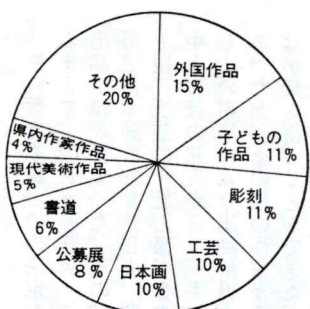
4 催物を知った方法



5 来館回数



6 今後希望する催物



庶務課

庶務課の分掌事務は大体において、この職場も同じであり、裏方的な仕事が多い。特に美術館等は、館の事業が学芸課の仕事を通して県民へサービスすることにあるので庶務としては、館員が安心して仕事に取り組み、よりよい仕事ができるよう、学芸と表裏一体の立場で事務処理することにより間接的に県民サービスにつながるものと思う。

次に庶務課の分掌事務のうち二、三取り上げて考えてみたい。① 休日等の勤務につ

学芸課

学芸課には、作品の収集活動を中心とした調査係、作品の保管整備にあたる資料係、展示会全体の調整を行っている展示係、それに広報と友の会活動を推進している普及係の四係が、それぞれの機能分担を行って「みる・かたる・つくる」ための日常の業務に携わっている。

展示業務としては、課をA・Bの二グループにわけて交替で企画を分担し、事務処理を行っているが、普及事業の

いて。現在は、土曜日の午後と日曜、祝日に三名の日直をあて、受け付けや電話当番、その他の事務処理にあたっている。そして日直者は次週の土曜日に、月曜、祝日勤務者は次の平日を代休としている。三名交替による日直ではあるが、庶務と学芸課を考えたり、女性の割振りを考慮したりして公平にやろうとするとかなりむずかしい問題がある。そのうえ公務のため代休日を変

更したりすると全員の揃う日も少なくなり館運営にも支障をきたす場合も考えられる。今後週休二日制が実施されるようになると益々割振りが困難となり、博物館等へ勤務する者の勤務時間等については、割切った大巾な改正が必要になると思う。② 公用車について。当館に一台の公用車がある。来客の送迎から作品の収集、返却、本庁主管課との連絡、支出事務のための

出納室、銀行、市内用務と本日に多目的に使用している毎日必要な館の足である。その一台の車が遠出をしてしまうと全く手足をもちがれたも同然で緊急な用務にも応じられない事態も生じる。当館の立地条件を考慮しても、館長車なり連絡用の車なりがもう一台必要である。まだまだ未完成の施設での問題はいくつかあるが紙面の都合で割愛したい。

美術館

アラカルト

一般的に美術館というと思えば、人が多い。

しかし、それと並行して行なっている日常業務については、あまり知られていない。これは、いわば美術館を裏側から支える役目をもっている。そこで、その一端を紹介してみたい。

拡大徹底も大きな急務になり、組織の整備が課題になっっている。今後の展覧会の企画も、来館者の期待に添えるものをを実施していきたい。

調査係

美術館では、常設展・企画展の展示資料充実のために、一、房総にかかわりの深い物語作家の作品及び関係資料。二、千葉県出身及び在住の、著名な現代作家の秀作。

三、近代美術の流れや、現代美術の動向を示す、日本及び諸外国の著名作家の作品。

の三つの柱で、順次的に、又は並行的に調査収集をすすめているが、そのねらいは、あくまで県民各層の要望に対応する、県立美術館の基本的性格にそって、今後ともすすめられるものです。

資料係

千葉県の生んだ日本近代洋

展示係

展示係の仕事は、展示活動に係る事務全般、つまり展示企画および展示室の利用調整ならびに展示備品の整備と管理等がある。展覧会の年間計画や貸会場利用の調整を行ない、美術館主催の企画展と県民の発表の場としての貸会場の調整を行なう。展覧会の看板のデザインや館内の展覧会案内のレタリングをしたりして展示予定を告知する。各展示室の自記温湿度計を毎週月曜日に取替えることも展示係の仕事である。

普及係

ポスター、館報などにより一般県民との接触を保ち、館の事業を広報する係である。館で催される展覧会などの内容を広く紹介し、より多くの皆様にこの施設を利用していただくため、PR方法等を計画し、数人の職員で、印刷物などをつくり、あて名書き、発送、配布、細かな仕事の連続である。

「美術館友の会」を通して一般の方々と接することも多く、やりがいのある仕事でもある。

メモ

千葉県芸術祭

昨年の千葉県芸術祭には、二四行事がもたれたが、そのうち、芸術作品部門の三つの展覧会が県立美術館で開催された。これらの展覧会も、年をおって県民の関心も高まってきており、好評裡のうちに終了することができた。

応募作品

一、六六七点

— 第二八回 県展 — 終る

第二八回千葉県美術展は、千葉県芸術祭の中心的行事として開催され、日本画、洋画、彫塑、工芸、書道の各分野に一、六六七点の一般応募作品があつまり、九九〇点の入選があり会員の出品作をふくめ



県展会場



県展をみる川上知事

日頃の成果を

— 第8回千葉県高等学校芸術祭 美術・工芸・書道展 —



高校芸術祭会場

昨年11月20日から28日まで開催され出品数、参加校は前

回をうわまわり、美術・工芸が56校、書道が70校であった。出品作品は、日頃行なっている授業、或はクラブ活動での成果を発表したものであったが、材料、表現なども極めて多彩なものとなってきた。

美術・工芸の方では油から日本画、水彩、デザイン、彫塑、フォトモンタージュ、陶芸、染色、木工、七宝などがあり、書道の方では、従来の漢字、かなから近代詩文書、少字数作品、篆刻、ろうけつ、発泡スチロール、陶板などがあつた。

更に、学校別の展示は、それぞれの学校の特色をみせ、一つの楽しさを加えていた。



特に洋画部門では前回、今回とも、たて続けに約半数が落選となつている。この傾向は必然的に「量より質」のいう面がみられたが、落選された方には気の毒であつた。

今回の日本画は、花を題材にしたものが比較的多く、人物や生活の匂いのある作品があまり見あらず、洋画は、従来になく充実し、作風も一

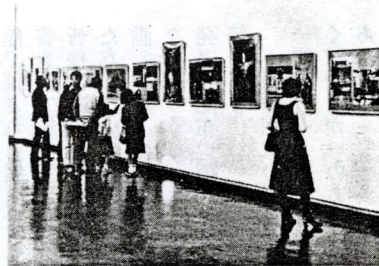
つの流派に片寄らず、変化ある個性が見られ、彫塑は、公募作品全体の質が特に向上し工芸には、若い作家の意欲的な作品が目だつた。書道では応募点数六百五十九点という県展創立以来の快記録となつたが、展示壁面の関係で三割の落選を作らなければならなかつたのが残念である。

貴重な記録

— 写真展「千葉県
の文化財」 —

今回から千葉県芸術祭に早くから参加し、伝統ある写真部門が加わり、昨年十一月二十日から二十八日まで開催された。

テーマは、千葉県各地にある有形文化財で、千葉県写真家協会員のうちの三十一会員による四十七点が展示された。一般にはなじみの少ない文化財であるが、仏像、建造物、梵鐘、土器、刀、絵画など、各分野にわたり、また、会場中央に設けられたこれら文化財の所在を示す地図などあわせ、千葉県の優れた文化財を知る貴重な資料展であつた。



写真会場

新収蔵資料紹介

昭和51年10月・12月

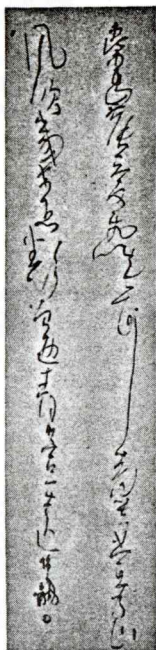
県展優秀作品の購入きまる

第二十八回県展の優秀作品の購入が終わり、新たに館収蔵作品として二点が加えられることとなった。

昨年度、第一回は奨励的な趣旨から招待出品以下を対象に五部門、五作品を購入した
◇大須賀力作「椅子の女」



◇浅見錦龍作「古泉千樫の歌」



する秀作であるとともに、その作家にとっても代表的な力作の一つに数えられることが望ましいと考えられた。

選考は当館評価委員によって慎重にすめられ、全出品作品一四四七点の中から、まずそれぞれの部門別に候補作品を選び、最終的には、日本画二点、洋画一点、彫刻二点、工芸二点、書二点の候補作品があげられた。再度、全委員で慎重に協議した結果、全評価委員の賛同によって三点の作品が推薦された。

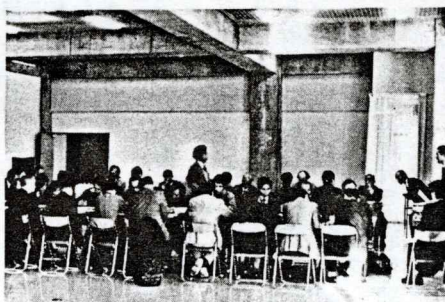
「県展優秀作品の購入」の要項にもとづく予算の制限から、結果的には写真掲載の二点の購入が決定した。

残る一点については別途予算によって購入の準備をすすめている。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
遠藤健郎作「巷の女たち」(リトグラフ集八枚)



展示会場の調整会議開催



昭和五十二年度の展示室利用に伴う展示会場調整会議が十二月十五日午後一時半より四時まで開催された。

利用希望の四十三団体、五十一人の代表者が出席し、展示会場の調整および全体協議等で美術展覧会の円滑な運営と利用者により親まれる展覧会とするため美術館側と利用団体の相互の協力について協議が行われた。

展覧会場の調整については、着実に美術館で作品を発表する団体数が増加してきている。

こともあり、期間によっては希望の重複する場合も見られたが、団体相互の理解などもあり五十二年度の調整はスムーズに行なわれた。

全体協議では、館側からのお願いや団体側からの質問、要請なども種々、活発にあった。展示室の照明やバスの平日運行、野外展示の検討についても希望が出された。

多くの期待と課題が美術館に寄せられているが、施設・設備的要請には、美術普及棟の早期実現が望まれる。

千葉県美術界新春パーティーの案内

第一回千葉県美術界新春展の開催を機会に、かねてより要望のありました作家各位を始め、美術評論家や美術記者のみならず、交えた新春の懇親パーティーを開催します。

日時 昭和五十二年一月八日(土) 正午

会場 ちば共済会館

尚詳細については庶務課へご連絡ください。

(047-214-1831)



手づくりの 楽しみ



版画講習会

年賀状を木版画で

昨年十一月二十七日・二十八日の両日にわたって開催した木版画講習会も、好評裡のうちを終了することができた。これは、版画の良さを知ってもらう手始めとして年賀状というところで計画したものの、講師に長谷川昂氏を迎え、参加者の個々にわたり丁寧な指導を受け、各自思い思いの図柄に工夫をこらし、手づくりの年賀状を届ける楽しさを刻みつけていた。

第三期収蔵作品展

一月五日(水)～三月三十一日(木)
九時～四時三〇分 月曜日休館

昭和五十二年一月五日からオープンされる収蔵作品展は昭和五十一年度から始まった常設展で第三期として公開されるものである。日本画は東山魁夷、富取風堂、関主税、立石春美、島多納郎、松尾敏男、大浦彌水。洋画は浅井忠とその師弟、大久保作次郎夫妻、原勝郎、椿貞雄、林明善、穀

嘸等の作品。彫塑では大須賀力、鈴木章、綿引司郎、荒居徳亮、大川逞一等。工芸は青木滋芳、信田洋、土肥刀泉、宮之原謙、山本正年、佐治正、小林正利。書は石井雙石、浅見錦龍、小暮青風、金子聰松、鈴木方鶴、鈴木清香。版画では浜口陽三、池田満寿夫の作品を展示する。本館特有の展示に研究資料の展示がある。今回は浅井忠のデザインになる陶器類、石井雙石の豆本、短冊、印譜、画帳、折本、硯先屏風が展示される。

美術普及棟の構想

目の来館者を迎えることができた。その人は、習志野市合津町の吉野惺さんで浅見喜舟作色紙屏風を贈呈し記念した。

藤野天光作「ああ青春」像建立きまる

前千葉県美術会長であり、日展で活躍された彫塑家藤野天光氏の文部大臣賞受賞作「ああ青春」像が、遺族のご厚意により、美術館の初の野外展示として、一般に公開されることになりました。三月十二日(土)を除幕式として、準備をすすめています。

する。

研究紀要の刊行

県立博物館として、年来の希望であった研究紀要の刊行を美術館として、三月中に行うべくめざしている。特に本館の収蔵作品のメインとなっている浅井忠の研究を中心にまとめられる。渡欧時代、京都時代をはじめ、これまで明らかにされなかった肖像画・日記類・デザインとしての浅井など近代美術史上に初めの報告がされる。

日誌抄

(10月～12月)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--|----------------------------------|---|---|----|----|----|---|---|---|---|----|----|----|----|----|---|---|---|---|----|
| 15 | 4 | 12 | 27 | 20 | 12 | 11 | 7 | 3 | 2 | 1 | 11 | 31 | 16 | 14 | 10 | 9 | 8 | 5 | 4 | 10 |
| 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 |
| こではし台中学校家庭学級三五名来館
展示会場利用調整会議開催、参加四三団体 | 第一回千葉県秀作美術展選考委員会開催
友の会作品展始まる。 | 君津中央公民館二六名、石塚小学校PTA四七名相模台小学校PTA四一名来館
講演会、香取正彦氏「父秀真を語る」、映画「余韻は生きる」聴講者二五〇名
富津中学校三百名来館
美術館協議会開催
「香取秀真とその週迎」展解説会、米田学芸員友納前知事来館 | 風教育功労者に、小暮青風(書、桜田精一(洋画)郡司幹雄(当館協議員)の各氏が選ばれる
評価委員会開催
千葉県美術展始まる
今井教育長来館
来館者二十万人目を記録
川上知事来館
沼田副知事来館
高松芸術祭美術部門展、文化財写真展始まる
28日まで版画講習会開く | | | | | | | | | | | | | | | | | |